第7章　まとめ

今回の調査では限られた面積の中で、実に多様な遺構・遺物を検出した。その消長を概略的に示したものが下表である。本来ならばそれぞれについて論述するべき内容をもつものであるが、物理的、かつ調査者の力量不足からそれらを行えなかった。そこでここでは各時代に分け、周辺の状況などと合わせまとめていくこととする。

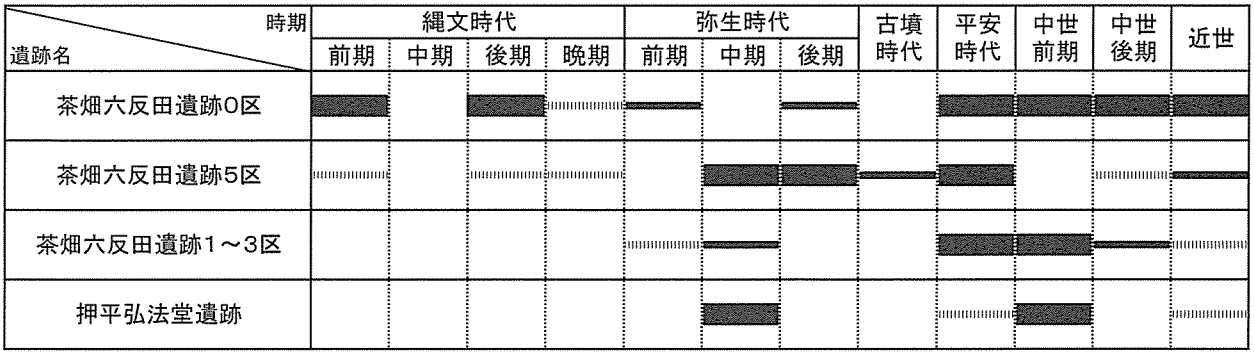
＜縄文時代＞

0区においては200基を越えるピットを検出した。しかしいずれも径0.3～0.4m、深さ0.2m前後のもので、規則的な配列などは見いだせなかった。これらはおそらく大半が人為的に掘削されたものであろうし、住居などの柱穴であった可能性も考えられよう。しかし竪穴状の掘り込みや炉跡などは検出されず、住居跡として積極的に復元、判断出来る要素はなかった。県内では近年、前期前半の西伯町早田第1遺跡において9棟の住居跡が復元されている（註1）。しかし検出面からのピットの深さは0.1m前後が多く、深くても0.2mほどである。竪穴状の掘り込みがないことから平地式住居と推定されているが、炉跡なども検出されていない。また濵田竜彦氏も指摘しているが（註2）、晩期～弥生前期に比定される平地式住居跡16棟などが復元されている日野町上菅荒神原遺跡（註3）も同様、その認定には慎重を要すると考える。

＜弥生時代＞

0区においては自然流路のみであったが、5区では中期中～後葉、および後期後葉の遺構が密に検出された。隣接して中期の拠点的集落と考えられる茶畑山道遺跡、蛇ノ川を隔てて茶畑第1遺跡があり、これらと密に関係する。中期が遺跡の中心的な時期であり、中葉では土坑が主体となる。この土坑には、大きく2種類のものがある。ひとつは竪穴住居を一回り小さくしたような大型のもの（土坑22～25）で、いずれも長径4m、短径3m前後の長方形を呈し、深さは0.2mほどと浅い。竪穴住居のように底面にピット、周壁溝をもたず、上屋をもつものであるのかどうか判断できない。ただし土坑22・25のように炭化材や焼土を伴うものもあり、簡易な上屋があった可能性は考えられよう。

そしてもうひとつは径が1m以内の平面円・楕円形を呈したものである。土坑30・31、32・33のように同規模のものが隣接するなど、分布上いくつかの群が見出せる。とくにD4グリッドには集中し、ここが掘立柱建物7・8、そして先の大型土坑に囲まれる空間であることは、これらが密接な関係を持つ可能性も考えられよう。また調査区東隅にはほぼ同時期と思われる掘立柱建物6もあり、中葉においては茶畑山道遺跡同様、掘立柱建物と土坑で構成される。



遺構・遺物　多　　遺構・遺物　少　　遺物　少

中期の住居は2棟検出したが、どちらも茶畑山道においては衰退期とされるⅣ－2期に相当する。また一昨年度調査の3区においても同時期の竪穴住居が検出され、集落の主体が南へ移ってきていることを示すのであろう。また、西約1.3kmに位置する押平弘法堂遺跡では土坑墓群が検出されている。今回本遺跡のものと土器の胎土分析を行なった（第6章特論1）結果、大きな差異は見出せなかった。幅1.4kmほどの台地の東際に集落、西際に墓域という構造も想定されよう。

＜古墳時代＞

今回の調査でもっとも希薄な時期である。0区では遺物がわずか、5区では直線的な溝1条のみがあった。また1～3区においても遺構は確認されていない。一方、茶畑第1遺跡から東へ展開する茶畑遺跡群においては、中～後期の集落が検出されているほか、南側の茶畑第2遺跡などでは古墳があるなど、蛇ノ川を隔てた東には密に遺構がある。0区の自然化学分析において、古墳時代に相当するⅥ層からプラント・オパールが一定量検出されたことは、当期の景観を復元する上で重要なデータとなろう。

＜平安時代＞

今年度調査において、もっとも注目される時期である。1～3区の調査成果から、0区西際を古代山陰道が通過する可能性が指摘されていた（註4）。しかしそうした痕跡を確認することはできず、1区から連続する同方向の溝もなかった。0区においては小規模な区画の水田跡を確認し、これらには大小の人の足跡が伴っていた。水田の規模は大きいものでも25㎡ほどであり、遺跡周辺に広がる現在のものとは格段の差をもつ。県内においては弥生時代のものとして米子市目久美、池ノ上遺跡、青谷町青谷上寺地遺跡などがあるが、平安時代のものとしては米子市今在家下井ノ上遺跡のみである。しかも後者については調査範囲も狭く様相は不明であるため、今回の事例が様相のわかるものとしてほぼ初めてといってよいであろう。

一方5区においては、1～3区と関連し、条里制の区画溝が確認できた。1～3区では大きな区画の溝のみであったのに対し、5区ではそれらをさらに再分割するものも検出したことは、条里制の構造解明において非常に大きな成果といえよう。

＜中世前期＞

1～3区において中心的な時期である。2区において1×1、2間の小規模な掘立柱建物が密集する。一方で、その西側にある0～1区は、床面積が20㎡を越えるやや大型のものが散在する。さらにこれらには建物周囲を柵で囲むものもあり、構造に違いが見出せる。0区は遺跡が立地する台地上のもっとも高いところ（中央部）にあたり、そうした地形的なことと関連するのであろう。また押平弘法堂遺跡では床面積30㎡を越える大型のものを含め、0・1区にみられるようなやや大型の建物がまとまっており、本遺跡とは様相を異にする。なおこれら建物に伴って、土地を区画するような溝は検出されていないが、建物の軸からみて概ね平安時代の条里と並行し、その方向性は踏襲されていると考えられる。いずれにせよ、中世の集落構造のわかる事例として、鳥取県においては非常に貴重な成果といえよう。

＜中世後期～近世＞

0・1区において、地形に沿うように耕作痕が検出された。自然化学分析から、乾田であった可能性も指摘され、県内における数少ない事例となった。0区ではこの耕作痕に伴い溝を検出し、わずかながらその構造についても資料が得られた。また0区と1区との境界にある溝7は、北側が蛇行し0

区調査区外へ向かう。これは1区境界と並行していた可能性があり、これによって土地区画がなされ、さらにそれが、現代にまで引き継がれていると考えられる。

この耕作痕に伴い、多くの15～16世紀の貿易陶磁器が出土した。5区においてもまとまって出土しており、遺跡周辺にそれらを使用していたであろう人々の屋敷（集落）があったと考えられる。時期的にやや下るが、0区においては中世末～近世初頭の遺構群を検出した。2棟の掘立柱建物を囲むように大型の平面凸状を呈す土坑があり、これらは凸部を掘立柱建物側に向ける。凸部が浅く、そこから方形部は深く掘り込まれることから、地下室的な構造をするものと考えられる。方形部は凸部から奥側の壁が袋状を呈し、貯蔵施設であったのであろう。この遺構群からは中国産天目茶碗などの貿易陶磁器があり、その遺構規模と合わせ、この地の有力者に関連する施設と考えられる。また、このすぐ南側の字が「下中屋敷」であることも想像を膨らませる。

5区においては東西、および南北方向の溝を10条検出した。溝60・63は現代耕作地の段とほぼ一致しており、さらにはこれらの方向性が、先述した平安時代の条里制に伴う溝とも並行する。やはり貿易陶磁器が多く出土した。この南に現在の茶畑の集落群があるが、この字が「屋敷」となっている。このほか周辺に目を向けると、「屋敷」「天王屋敷」などといった字が多い。今回検出した遺構などとともに、近世農村部における集落構造解明の糸口がある地域といえよう。

以上甚だ簡単であるが、今回の調査成果についてまとめた。縄文から近世にかけほぼ間断なく遺構・遺物が検出され、集落域から耕地、そして集落域へと同じ土地が時期によって異なる機能を持つ場へと変遷する様が明らかになった。その時期における人と土地との関わり合いを知る上で、非常に興味深いデータであろう。その中で、平安時代において設定された土地区画が現在まで踏襲されていることは、この地域の歴史をみていく上でも重要である。

多くの情報が得られた割に、それをきちんと整理、咀嚼できていないのは偏に調査担当者の力量不足によるところである。このような調査員を、発掘調査に従事してくださった作業員や整理作業員のみなさん、そして地元の方々を含め多くの方々が暖かく見守ってくださり、そしてご協力・ご教示頂いた。最後になりましたが、記して感謝致します。

（中森・木山）

（註）

1．泉　潤哉ほか編　2003『早田第1遺跡・早田第2遺跡発掘調査報告書』西伯町教育委員会
2．濵田竜彦　2002「山陰の縄文時代後期・晩期の集落－大山山麓を中心に－」
『考古学ジャーナル』№485
3．八峠　興、西川　徹編　1999『上菅荒神原遺跡』鳥取県教育文化財団
4．八峠　興、湯川善一編　2002『名和衣装谷遺跡・古御堂金蔵ヶ平遺跡』鳥取県教育文化財団